【エントリー情報】
自治体名：福岡県 糸島市
学校名：糸島市立桜野小学校
ご記入者：吉田 裕子（よしだ ひろこ）

【設問】
1 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

糸島市では、「教育・文化先進都市『いとしま』の創造～21世紀を担う“次代の変化に対応できる人づくり”」を教育の基本目標に掲げ、児童生徒の教育活動の充実と教職員業務の効率化を図るため、次の4つの情報教育整備などに関わる基本方針が示されています。
方針１ 学習支援ソフトなどを活用した個別最適な学び、協同的な学びの充実
方針２ 教職員業務の効率化・高速化
方針３ 情報モラル教育の充実
方針４ 教員の情報機器活用能力の向上
上記の基本方針の具現化のため、主に、①ミライシードやGoogle for Educationなどを活用した個別最適な学び、協同的な学びの充実のため、ICT支援員及び情報教育担当教員などによる年３回のICT活用研究会と月１回のICT活用連絡会(30分)における先進的な事例の紹介(教育委員会)、校内組織によるICT活用についての活用方法の共有と確実な実施の把握(学校)、②教員の情報機器活用能力の向上のために、ICT支援員(教育委員会)の学校訪問による授業などの直接的な支援(週１回半日)が行われています。
本校の学校教育目標は、「桜野を愛し、知・徳・体を輝かす子どもの育成」です。この目標を達成させるために、学びをつなぎ、人と人をつなぎ、明日につなぐ「つなぐ」を意識した教育活動を通し、よりよい集団作りをめざしています。
糸島市の目標と本校の目標を受け、ICT を活用した授業作りも推進しています。そのために、情報教育担当教員を中心に活用方法の共有を日常的に図るとともに、各担任と情報教育担当教員、ICT 支援員が連携し、実際の授業や学習にどのように活用すれば個別最適な学びや協同的な学びの実現及び情報活用能力の向上が図れるかを模索しながら取り組んでいます。

2 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500文

字以内）

糸島市及び本校の目標に沿って一人1端末の活用をしてきたこの3年間で、「学習が苦手な子どもでも、ICTを活用すると学習に取り組みやすく、どの子も授業に参加でき、教育効果が高い」と実感しています。もともと私は10年ほど前から、漢字ドリル教材に同版されている書き順やフラッシュカードなどが入ったソフトを活用したり、社会科で関連動画や資料を見せたりするなど、ICTを活用した授業に取り組んできました。ビジュアル化や動きがあること、ゲーム性があることで、よりわかりやすく、印象に残ること、意欲を持って学習に取り組むことができるのではないかと考えたからです。あくまでも、一斉授業での学習資料提示にすぎませんでした。

2020年1月に一人1端末が支給され、Google for Educationと「ミライシード」が導入されました。しかし、当初は仕組みや機能がわからず、簡単なレクチャーはあったものの、いつ、どこで、どのように活用したらいいのか、右も左もわからないままの活用スタートでした。「このままではいけない。学習にうまく取り入れれば、今までできなかった新たな学び方になるのでは」と思ったこと、ICT推進の役割を担うことになったこともあり、Googleや「ミライシード」のサイトなどを活用し、自分なりに機能を探ったり試したりしていきました。また、県教育センターの研修を2年間受け、自己研鑽を図りました。その中でわかったことを情報共有したり、「ミライシード」の具体的な活用の校内研修などを行いました。

しかし、ICT活用に抵抗がある教師とそうでない教師とで活用に差があることが課題として出てきました。要因として、①使用中の不具合に対応できない、②使いどころがわからない、③今までのアナログ(手書き)でできていたから、わざわざデジタル化しなくてもよいのでは　などを感じました。そこで、担任する子どもたちと取り組んだ成果や課題、活用方法、何より子どもたちが生き生きと活動し達成感を味わう様子や学習、授業の良さ、デジタルの便利さを、積極的に広げるように心がけました。他学年の担任とも頻繁に対話し、様々な活用を模索し、ときには一緒に教材を作っていきました。今年度は担任をしていないこともあり、①ICTを活用した授業を主として行い、担任の先生に見てもらうことでイメージをつけてもらうこと、②担任の補助として授業中の不具合についてのリカバリをすぐ行うこと、③教材研究を一緒にすること　などを積極的に行うことができたことで、全学年のICT活用推進を図ることができてきました。本校の教育課程評価における「ICTを活用した日常的な授業作りに取り組んだ」の評価項目において、令和4年度後期の46.2%から、令和5年前期は62.5%と、まだまだ課題は残るものの、確実に向上しています。

また、徐々に良さが広まり活用が進むなか、ICTに関わる相談を受けることが多くなりました。そこで、より良い活用方法や機能を探ったり、Googleやミライシードのアップデートを積極的に確認し試すことを心がけたり、ICT支援員に機能を教えてもらったりして、さらなる自己研鑽を図る努力をしています。ICT活用に抵抗がある先生方に「こうすれば大丈夫」を示すことで、より活用を推進できると思ったからです。

3 (3-1) ICTを活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000文字以内）

Googleフォームを利用したアンケートで、集計・集約が容易にできるようになりました。校内だけでなく、中

学校区での研修などのアンケートができるので、学校間を越えて意見を素早く得ることができます。また、Googleの共同編集機能を活用することで、複数校教師で構成される研修の名簿の作成や情報共有を行うことができ、業務の効率化が図れました。さらに、中学校区の担当者で構成するGoogleクラスルームを活用し、研修のまとめのテンプレートや記入したものの提出、出張依頼や資料共有、アンケートの配信などが容易になり、今まで手書きであったものやFAX、郵送などをしなくてよくなり、働き方改革がかなり進んだ印象です。
Googleのアプリ(Jamboard、ドキュメント、描画キャンパスなど)やオクリンクの活用の推進も進みました。デジタルは様々な機能がありますが、「書いたり消したりが容易であること」「付加・修正、入れ替えができること」「元に戻すこと」ができます。これは、子どもたちが学習を進めるなかで、安心して様々に試すことができる強みだと考えます。例えば文章を書く場合、鉛筆と紙では、書いたり消したりすることで、紙が破れたり、途中に付加・修正するために、その後ろの部分を大幅に消したりするため、学習意欲が低下してしまうことが見受けられます。その点、デジタルでは前述の強みがあるので、子どもたちは「より良くするためにはどうしたらよいか」を考えることを中心に学習を進めることができます。キーボード入力がスムーズになるまでは、手書き入力を活用することで、低学年でも文章を書くことができます。作文や手紙などで手書きにする必要がある際にも、一旦端末上で書き換えを繰り返しながら文章を書き、それを手書きします。“思考”と“書く”とを分けて行うことができ、しっかり内容を練ること、丁寧な字で書くこと、それぞれに集中することができていました。写真など画像の挿入もできるため、各自、自分の伝えたい内容に合わせて画像を選び、画像に説明を入れたり大きさを変えてレイアウトしたりするなど、自己選択・自己決定しながら、自由度のある表現活動が可能になりました。国語科でのリーフレット作り、社会科の新聞記事作成、生活科や理科での観察カード、図画工作科での作品カードなど、様々に活用できました。デジタルで表現することは、文字や絵のうまさを気にすることなく活動することができ、表現が苦手な児童も自分なりの表現で作品を作り上げ、達成感を味わいながら学習することができると思います。共同編集と配信の機能を使って、児童たちで児童会活動の原案や資料を作成し、全校に配布する取り組みも進みました。ペーパーレス化、効率化、時短ができ、働き方改革にもつながっています。
更に、「オクリンク」や「ムーブノート」では、活動を見える化したり友達と考えを共有したりすることができます。自分の考えを広げたり深めたりでき、活動が進まないときには、友達の考えを参考にして活動することができます。このことは、誰もが学習に取り組むことができるだけでなく、自然と交流をし、互いを認め合いながら協働的な学びが生まれる良さだと思います。
特別支援学級においては、市から一人１端末とは別に１クラス２台のiPadが支給されおり、漢字ドリルと連携したアプリを活用した漢字の学習や都道府県の学習、計算の練習などを活用しながら個に応じた学習に取り組んでいます。また、読むことに苦手を感じる児童が多いため「デイジー教科書」(本校は国語と社会のみ)を導入し、個に応じてふりがなをつけたり、音声読み上げ機能を活用して音読練習や教材理解の一助にしたりしています。支援を要する児童は、「これならがんばれそう」と学習意欲を高めたり、もう一度確かめたいところを自分で見つけて試したりして、個別の学習に生かしています。

(3-２)ICT活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。（1,500文字以内文字以内）※本設問のみ任意回答

４ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000文字以内）

私は「オクリンク」の活用を主として行いました。それは、直感的、感覚的にカードを作成し、つなげたり並べ替えたりできることができるので、どの子も学習に参加でき意欲を高めることに有効だと感じたからです。

◯小４図工「へんてこ山の物語」では、「ライブモニタリング」と「カードを送る機能」が大変有効でした。

活用した背景と学習の問題点として、

・ゲームや動画など児童が一方的に情報を受けることが多く、自ら豊かに想像力を働かせ表現が難しい状況がある。

・発想が浮かばない児童や、ほかの子どもの真似になってしまう児童がいる。

上記のことが挙げられます。そこで、次の2つの機能を利用しました。

・「LIVEモニタリング」

各自がアイデアスケッチ(1カード1スケッチ)を描いている際大型モニターに映し、友達のカードを見て活動の手がかりにする。

・「カードを送る機能」

①アイデアスケッチを描いたカードを友達に送ってもらい、お互いのアイデアを共有する。

②カードを選ぶときには声をかけ、友達のデザインを認めることで描く意欲を高める。

アイデアスケッチを集めたら、各自使用したいカードを画面に表示し、大きさや向きを変え、デザインを組み合わせて「へんてこ山」の形を描きました。これは、①あらかじめ形があるので画用紙に安心して描くことができる、②普段発想が難しい児童や同じ絵になりがちな児童も色々なデザインを組み合わせることで自分だけの絵を描くことができる、という良さがありました。

より豊かな表現を目指すため、物語創作と対話も取り入れました。へんてこ山の物語をかくカード(自分の山に住む生き物やある物、出来事など)を配信し、絵や文を使って物語を創作しました。また、絵の中で自分の分身を描いたペープサートを動かし、楽しく遊びながら発想を広げていきました。

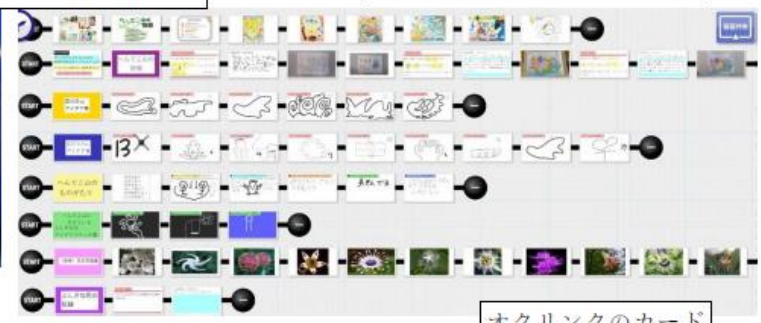
振り返りと評価にも有効でした。児童は、授業終わりに自分の絵を写真に撮り、スタディーログをつけることで、自分の成長を感じるとともに、次回への意欲が高められました。教師は学習過程や振り返りを見て、教材研究や評価に活用しました。

このような機能活用によって、児童たちは友達と協働しながら自己表現や発想を広げ、楽しみながら学習できるようになりました。

カードを鑑賞し送り合う様子

カードを見て下描きする様子

アイデアスケッチ中の
LIVE モニタリング



オクリンクのカード

○小２国語「お手紙」では、「並べ替え」「LIVEモニタリング」「録画」が役立ちました。

まず、物語理解のために、教科書の１挿絵１カードを配信、挿絵の「並べ替え」では、従来の代表者が黒板でするのとは違い、朗読を聞きながら全員が活動できました。また1人ずつ挿絵を印刷し配布する手間が省けました。

その後大型モニターの「LIVEモニタリング」の各自のカードを見て、なぜその挿絵を選んだかや違いについて意見交流をしました。自分の考えを持ち、交流することで、叙述をもとに読む必要性を学ぶことができました。

音読劇の活動では、「録画」を活用しました。ペアでの練習の様子を録画し、即座に再生して振り返り、改善点を考えました。これは、①動画で自分の様子を客観的に見ることで、具体的な改善案が浮かびやすくなる、②録画したカードをつなげることで、自己の成長を実感し、自信を持って本番の音読劇をする、ということにつながりました。

このような機能活用により、児童は物語の理解と表現スキルの向上を促進し、同時に自己表現や成長の実感を得ることができました。